

フランスにおける五月—六月の出来事

—フランス—生活のための運動—

日常生活の質

一九六八年五月—六月の蜂起は一八七一年のパリ・コミューン以来、フランスにおいて起こった最重要な事変の一つであった。それはフランスのブルジョア社会の基礎を震撼させたのみならず、それは現代産業社会に対する先例のない重要な諸問題を提起し、その解決を提出した。それはいたるところで、革命家によるもつとも詳細な研究ともつとも徹底的な議論を必要とする。

五月—六月蜂起は工業化した、消費に位置づけられた国—アメリカよりは発展は低い、基本的には同じ経済的カテゴリーにある国—で起こった。蜂起は、現代産業社会の富と資源は革命的抵抗を常に吸収することができる、という神話を打破した。五月—六月の事変は、資本主義の諸矛盾と階級対立は成層化と産業主義の進歩した形態等によって消滅させられないで、形態と性質が変化するだけで

ある、ということを示した。

蜂起はすべての人に驚愕を与えたが、その中には、マルクス主義、情況主義、そしてアナキズム等の諸運動のもつとも精緻な理論家達を含んでいた、という事実は、五月—六月の事変の重要さにアンダーラインを施し、現代社会における革命的不安動揺の諸源を再調査する必要を提起する。パリの壁上の落書き—「想像力が権力を取る」「禁制が禁止される」、「死んだ時間のない生活」、「けつして働くな」—は過去から受け継がれたいかなる理論的大著よりも、これらの諸源のより厳密に探る分析を表わしている。蜂起は、我々が古い時代の終末にあり、新しい時代の始まりに十分に入っている、ということを示した。今日の革命の動機力は、少なくとも産業化した社会では、単に貧窮や物質的必要のみならず、日常生活の質、経験の解放の要求、自分自身の運命を支配する力を獲得する試み等でもある。パリの壁上の落書きが初めは極く少数の人々によって書き散らされた、ということは大したことではない。我々が見てきたあら

ゆることから、落書き（それは今や数冊の本の内容を作っている）がバリの何千何万人もの想像力を捕えた、ということでは明らかである。それらは市の革命的神経に触れた。

自然発生の多数者運動

マジョリティ

反乱は、それがフランスにおけるほぼあらゆる階級線を横断した、という意味で多数者運動であった。それは学生や労働者のみならず、専門家、技術者、及び国家、産業、商業等の官僚制のほとんどあらゆる階層における事務仕事の人々等をも含んでいた。それは専門家と労働者、知識人とフットボール選手、テレビ放送者と地下鉄労働者等の中に広がった。それはバリの憲兵隊に触れさえし、フランス軍の大量の徴募兵にほぼ確実に影響した。

反乱は主に若者によって開始された。それは大学生によって始められ、それから青年産業労働者、失業青年、そして「皮ジャンパー族」——いわゆる都市の「義務を怠った青年」——等によって引き継がれた。特別な強調は高校生と思春期の若者に与えられねばならない、そして彼等はしばしば大学生以上の勇氣と決断力を示した。しかし、反乱は年長の人々——ブルーカラーとホワイトカラーの労働者、専門家、知的職業者等——にもまた広がった。それは意識的な革命家、特に、その存在を誰もかすかにさへ想わなかったアナキストの親和グループによって触媒されたけれども、蜂起の流れ、運動は自然発生的であった。誰も「それを呼び出し」はしなかった。誰もそれを「組織」しはしなかった。誰もそれを「統制すること」に成功しはしなかった。

交換し、彼等の社会的「生れ」、あるいは「素性」等についてのいかなる自意識も持たないで共同行動に加わることができた、ということは厳密にこの新しい同一の状態を基礎としている。

反乱はそれ自身の無階級の、非位階制社会の端緒を創った。その最初の仕事はこの質的に新しい領域を国中に——フランス社会のすみずみに——拡張することであった。その希望はあらゆる形態——大衆集会とその運営形態、行動委員会、工場ストライキ委員会等々——における自己管理の、経済のあらゆる領域、真に生活それ自身のあらゆる領域への広がりの中に存在した。この仕事のもっとも進んだ意識性は、共産主義者に統制されたCGTが大きな力を発揮している伝統的な産業の労働者の間よりも、むしろ、電子工業のような新しい、技術的に進歩した産業の労働者の間で現われたように思われる。（これは、学生——労働者行動委員会における若い斗士達によって私に話されたところの多くの個々ばらばらの、しかし、印象的なエピソードから引き出された、仮の結論である、ということを確認しておきたい。）

権威と位階制

この上なく重要なことは、五月—六月の反乱が権威と位階制の問題に投じたその光である。この点では、それは個々人の意識過程のみならず、個々人のもつとも重要な無意識的な、社会的に条件付けられた習性にも挑戦した。（権威と位階制の習性が生活のまきに初めに——幼児期の家庭環境において、家庭や学校での子供時代の「教育」において、仕事、「レジャー」、毎日の生活等の組織において

五月—六月の日々のほとんどを通して、お祭気分が支配的であり、コミュニケーション以来バリでは見られなかったところの連帯、相互扶助、真の自我及び自己表現等の覚醒が支配的であった。人々は自分自身と自分の同胞をあらためて文字通り発見した——あるいは、自分自身を改造した。多くの工業の都市では、労働者は動けなくなる程広場に詰めかけ、赤旗をかかげ、彼等の手に落ちてくるあらゆるピラをむさばるように読み、かつ論じた。生活のための熱狂が何百万もの人々を把握した、人々が所有できると思ひもよらなかった諸感覚の再覚醒、人々が感じ得ると思ひもよらなかった喜びや盛んな意気等が、何百万もの人々を把握した。舌は緩められ、耳と目は新しい鋭敏さを獲得した。古い曲に付けた新しい、しばしば野卑な歌詞の歌があった。多くの工場の床はダンスフロアに変えられた。フランスの非常に多くの若者の生活を凍らせてきた性的抑圧は、日常茶飯事として粉砕された。これはまじめくさった反乱、つまり、「前衛」党によって官僚的に企図され、操作されたクーデターではなかった。それは機知に富んだ、皮肉な、創意工夫の豊かな、創造的なものであった——そして、その中に、その強さ、莫大な自己動員の能力、その感化力性等がある。

多くの人々は、彼等の社会的ヴィジョンを妨げてきた狭い制限を超えた。多数の学生に対して、革命はとりすました意味の「学生時代」——それはアメリカでは「身分証明書」によって表わされる特権的な、気どった状態——を破壊した。サシェ（ソルボンヌの文学部の新校舎）の行動委員会にきた個々の労働者は、今までの「労働者」であることを止めた。彼等は革命家になった。そして、その生活が大学、工場、事務所等ですこされてきた人々が自由に会い、経験を

一個人に注入された、ということとは長々しく論じられるべきではない。服従と命令の「原型的」規範のように思えるところのものによる個人的性格構造のこの形成は、我々が若者の「社会化」と呼ぶところのものにそのエッセンスを構成する。）

官僚的「組織」、強制的公式的な位階制及び構造等の神秘は、非革命期間、もつともラジカルな運動体に浸透した。権威的、位階制的刺激への左翼の顕著な感受性は、それが公然と打倒しようとする追求しているところのまさにその社会にラジカルな運動体が深い根を持っていることを説明している。この点では、ほとんどあらゆる革命組織が潜在力のある反革命源である。ただ、もし革命組織が、その形態が革命によって開始された自由の直接的、非中央集権的形態を反映しているように「構造化されて」いるならば、ただ、もし革命組織が革命家の中に自由の生活スタイルと個性を助長するならば、反革命へ向うこの潜在力は消滅され得る。その時にのみ、革命運動体が革命に溶解し、外科手術系が治療する傷の中に消失するように、その新しい、直接民主主義的社会形態の中に消失することが可能である。

革命行動は、権威と位階制を伴に既成秩序内に維持するところのあらゆる臆から離れて自由に振舞う。社会的活動舞台への人民の直接的登場は、革命のまさにエッセンスである。革命は直接行動のもつとも進んだ形態である。なお、「正常」時における直接行動は革命行動のための絶対必要な準備である。両方の場合とも、既成の位階制的な枠組内部の政治的行動に対する下からの社会行動の代替がある。両方の場合とも、「大衆」、階級、社会階層等の革命的個人への分子的变化がある。もし革命が成功するものであるべきならば

もし革命が革命的イデオロギーによって覆面された反革命に移し変えられるべきでないならば—この状態は永続的にならねばならない。あらゆる公式、あらゆる組織、あらゆる「確実な、試験済みの」プログラム等は、革命の要求に道を譲らねばならない。革命それ自身よりもっと偉大な意義を持ついかなる理論、いかなるプログラム、あるいは、いかなる党もない。

五月—六月の蜂起に対するもつとも深刻な障害物の中には、ドールと警察のみならず、左翼の硬化した組織—多くの工場におけるイニシヤティブを窒息させた共産党やソルボンヌの大衆集会にあるような悪評をたてたレーニン主義者やトロツキストのグループ—があった。私はここで、自分自身をチェ・ゲバラ、毛沢東、レーニン、トロツキー（しばしば四人は混合されていたが）等とロマンチックに同一視した多くの個々人についてではなく、完全な自身であること（「自己同一性」）、イニシヤティブ、そして意志等を堅固な規律を持った位階制的な組織に引き渡した個々人について話しているのである。たとえいかにこれらの人々が好意的であつたかも知れないとしても、革命に「規律を与え」ること、より正確には、彼等の組織が既成秩序から同化してきた服従と權威の習性を革命に注入することによって、革命を非革命化することが、彼等の仕事になつた。高度に構造化された組織—事実、「革命家」が打倒することを公言するまさにその社会に基づいてモデル化された組織—に関与することによって助長されたこれらの習性は、議会的マヌーバーを用いること、秘密の幹部会（「黒幕会議」）を用いること、革命によって創られた自由の革命的形態を「統制」しようとする試み等に導いた。彼等はソルボンヌ集会に操作という有毒な発火を作り出した。

クに革命の顕著な弁証法を現わした。社会の日常のみじめさは、欲望と自由の実現化の可能性によって光を当てられ、目立たせられた。これらの可能性が増せば増すほど、日常のみじめさは益々耐え難くなる。この理由の故に、フランス社会が歴史上のいかなる時代よりも、近年が一層裕富になつてゐる、ということは大した事ではない。高度にゆがめられたブルジョア形態における富は、自由のための物質的条件が発展した、ということ、及び新しい、解放された生活のための技術的可能性が熟し過ぎてゐる、ということを示しているだけである。

これらの可能性が、たとえもしほとんどの人々によって気づかれていないとしても、長い間フランス社会に取り付いてきた、ということとは明白である。商品の無感覚な消費はフランス社会のみずばらしい現実と今日の革命の解放の可能性との間の緊張をゆがんだ方法で図示している。それは地味な食事とせいたくな肥満が個人における緊張を現わしているのとちょうど同じである。商品という食事が味気なくなり、社会的肥満が耐え難くなる時が結局到達される。破局点は予言し得ない。フランスの場合、それは五月十日、つまり全国の意識を震撼させ、「もし学生、あれらの（ブルジョアジーの息子達）がそれをなし得るならば、なぜ我々にできないことがあろうか」と労働者に問題提起をした日のバリケードであつた。もつとも意識的な革命家達には、完全に見えないことであるが、分子のプロセス、つまりバリケードが革命行動に真逆様に落ちるがごとく移つて行つた—プロセスが、フランスで進行していた、ということは明らかである。五月十日の後、日常生活の凡庸さと解放社会の可能性との間の緊張は、爆発して歴史上最大のゼネ・ストになつた。

私が話しかけた多くの学生は、これらのグループが、もしソルボンヌ集会を「統制」することができないならば、ソルボンヌ集会を破壊すべく準備している、と完全に確信していた。その諸グループは革命的形態の生命力に関心を持っていたのではなくて、グループ自身の組織の成長に関心を持っていた。あらゆる人が自由に意見を表明することが出来る自由の真正の形態を創出していたならば、集会はあらゆる官僚的に組織された諸グループを集会の中から追放することを完全に正当化されたであらう。

「三月二日運動」が革命的集会の中に没し、名称だけは残して、事実上、組織として消滅した、ということは、「三月二日運動」の永続的な信用をとどめるものである。「三月二日運動」は、それ自身の集会において、「集会の意向」によってあらゆるその決定に到達した、そして、それはあらゆる傾向の意見を現実に自由にテストするために、その中にあらゆる傾向を許した。このような寛容は運動の「効果性」を減じはしなかった。このアナキイ運動は、ほとんどあらゆる観察者が共に同意しているが、いかなる他の学生グループよりも、革命を触媒するためにより多く働いた。「三月二日運動」及びアナキストや情況主義者達のようなグループを他のすべてのグループから区別するものは、それらの諸グループが「権力の掌握」のためではなくて、権力の分解消滅のために働いた、ということである。

現代革命の弁証法

五月—六月のフランスの事変は、力強く生き生きと、ドラマチック

ストライキの規模の大きさは、フランス社会のほとんどあらゆる階層が深い不平不満にとらわれていたこと、革命は特殊な階級のみならず、生活を強奪され、否定され、だまし取られたと感じたすべての人に錘を降ろしていたことを示している。革命的衝撃は、他のいかなる階層にも増して、現存する秩序に「順応」してしまつてゐるはずであつた一階層—若者—からきた。それはドール主義の「文化」というパンかゆで栄養を取つてきた、そして、大戦前の文化の相対的に魅惑的な特徴と新しい文化のみずばらしさとの間の対照を経験してこなかった若者であつた。しかし、パンかゆは効能を示さなかった。若者を社会に選出し、吸収するその力は、事実、フランス社会のほとんどの批評家によって期待されたよりも弱かつた。パンかゆで育つた社会は、特に若者において、生活のためのドライヴに耐えることができなかった。

同様重要なことには、アメリカにおける同様、フランスにおける若者の生活は、彼等の年長者の生活を形づくつた不景気の年や物質的安心の探索等で重荷をけつて負わされてきていなかった。フランス人の生活の大勢の現実、若者によって、生活であるもの—のみずばらしい、醜い、我利我利の、偽善的な、精神的に破滅的なもの—を取り捨てられた。この単一の事実—若者の反乱—はシステム自身の条件を納得させることがシステムには不可能である、ということのつぎきならない証拠である。

ドール主義の社会のすさまじい内部崩壊、革命それ自身に先立つこと長い崩壊は、伝統的な、経済的に位置づけられた「革命」の公式のいかなるものにも適合しない形態をとつた。多くがフランス社会における「消費主義」について、それが社会安定の墮落形態

であるという程にまで書かれてきてしまっていた。客観物、つまり商品が教会、学校、マス・メディア、家庭等によって助長された主観的誠実にとって代りつつあった、という事実は、予想以上に大きな社会的分解の証拠として見られているべきであった。伝統的階級意識が労働者階級内で減衰しつつあり、という事実は、諸条件が多数者社会革命のために成熟しつつあり、少数者階級革命のためではなかった。という証拠であるべきであった。服装、音楽、美術、そして生活スタイルにおける「ルンペン」的価値が、フランスの青年の間に広がっていた、という事実は、「無秩序」と直接行動のための潜在力が伝統的政治抗議の前面に隠されて成熟しつつあった、という証拠であるべきであった。

弁証法的皮肉のすばらしい一ひねりによれば、「非ブルジョア化」のプロセスは、まさに、フランスが先例のない高さの物質的富に達した時、進行しつつあった。ド・ゴールの個人的人気がたとえどんなであったとしても、非体制化のプロセスは、まさに国家資本主義が、近年のいかなる時よりも社会構造において一層堅固に守られているように思われた時、進行しつつあった。さえない現実と解放の可能性との間の緊張は、まさにフランス社会が一九二〇年代以来のいかなる時よりも一層確固不動に思われた時、増大しつつあった。疎外のプロセスが、まさにブルジョア社会の真実が共和国の歴史上のいかなる時よりも一層確実であると思われる時、進行しつつあった。

社会的不安をかもし出す諸問題が質的に変化してしまっていた、ということが要点である。生存、貧窮、断念等の問題は生活、豊富、欲望等の問題に変化してしまっていた。「アメリカの夢」同様、「フ

ランスの夢」は腐食しつつあり、人の心を惑わせるものではなくなりつつあった。ブルジョア社会は、何かを「与える」能力がある、という唯一の条件の基で、ブルジョア社会が与えることができたところのすべて―意味のない、無感動な仕事によって得られる多過ぎるみずばらしい品物―を与えてしまっていた。経験それ自体（「前衛党」や「確実な試験済みのプログラム」ではない）が五月―六月の蜂起のための創造性の動員力、及び動員源になった。そして、これはそのあるべき形である。蜂起が自然発生的に勃発する―歴史上あらゆる偉大な革命の特徴―ということが自然であるのみならず、革命が自然発生的に展開する、ということもまた自然である。このことは、革命グループが事変の前で沈黙してたがずむ、ということをもつたに意味していない。もし革命グループが観念と提案を持つならば、それを表明することがグループの義務である。しかし、革命によって創出された社会形態を操作の目的のために利用すること、革命の背後に隠れて秘密に動くこと、それに疑惑を持つこと、そして、それを「栄光の党」によって取って代えようとすること等は、この上なく犯罪的であり、容赦できない。革命は事実上あらゆる政治組織を吸収するか、それとも、政治組織は自己完結になる―官僚制、位階制、人間の奴隷化等の不可避の諸源になる―かのどちらかである。

革命の自発生を消滅させること、自己動員と自己解放の間の連続を破ること、自己を過去から借りてこられた政治組織や制度と調停するために諸プロセスから自己を除去すること等は、革命の解放目標を損うことである。もし革命が下から発しないならば、もし革命が、それが社会それ自体になるまで、社会の「基礎」を広げないな

らば、その時、革命は単なるクーデターである。もし革命が、日常生活が各個人を支配する代りに、各個人が自身の日常生活を支配する社会をつくり出さないならば、その時、革命は反革命である。社会解放は、もしそれが同時に自己解放であるならば―もし「大衆」運動が最高段階の個体化と自己覚醒を含む自己活動であるならば―唯一に起り得る。

革命の条件を準備する底返での分子的運動において、革命を前進させる自己動員において、革命を強化する楽しい雰囲気において―これらの引き続く諸段階のすべてにおいて―我々は個体化の連続、つまり、権力が分解消滅させられ、個人の経験と自由の拡張がほとんど美的に我々の時代の可能性と一致するところのプロセスを持つ。このプロセスを理解し、そして、それを思想に表現すること、そのプロセスを触媒し、そして、次の実際の任務を提起すること、革命プロセスを「統制」しようと追求するイデオロギー的運動を曖昧なところなく取り扱うこと等―これらは、フランスの事変が示してきたように、今日の革命家の第一の義務である。

パリ

一九六八年七月